


平成27年6月23日

原発事故による被害について

菅波 香織 

原発事故後、4年半が経過する今、被害の状況は良くなってきているのか、復興の道を歩めているのか。住民の対話の場では、「今の方が辛い」という声が多くあがる。原発事故による避難と、コミュニティ崩壊、放射能汚染問題は、複雑さを増し、課題は細分化して見えにくくなり、更に可視化しにくくなっていった。

私の住むいわき市は、人口約30万人。避難指示は出されなかったものの、事故直後は、約半分の人が避難し、町を離れたと言われているほどであった。その後、避難者の方が約2万4000人居住し、約1万人とも言われる原発作業員の方や除染作業員の方が行き交う町となった。一方で、いわき市からのいわゆる自主避難者も、公式な数値としても、未だ5000人ほどと言われている。いわき市から離れている理由を問うアンケートを見ると、低線量被ばくに対する不安、未だ収束していない原発の近隣に居住することへの不安をあげる声が非常に多い。

避難してきている方々が帰還を諦め、もしくは、帰還までの間、故郷に気候が似ているいわき市（夏は涼しく、冬は雪がほとんど降らず温暖な気候）に居住することを選択することが増え、賃貸物件には空きがなくなっていく。今まで誰も手付けなかったような土地や、大震災で壊れた古い建物が解体されて更地になっていた土地がどんどん売れていき、気が付くと新居が建っている。国土交通省が公表した平成27年1月1日現在の公示地価の上昇率で、全国上位10地点を独占した。

1 事故直後

震災直後の津波や原発の爆発という悲惨で過酷な体験は、津波に飲まれたり自宅を失ったりしていない私にとっても、未だに、乗り越えられていない。津波の写真を見たり、事故直後のことを思い返したりするだけで、涙が流れて動悸がしてくる

のである。

私は、震災時、4人の子どもを育てながら、いわき市で弁護士をしていた。第5子を妊娠中で、子どもたちを自然が豊かないわきで育てていけることに、とても幸せを感じていた。夏は海で泳ぎ、子どもたちと一緒に海釣りで魚を釣って食べ、山に登り森で虫獲りをし、近所の空き地の雑草で遊ぶ生活をとても気に入っていた。しかし、その生活は完全に失われた。

車を運転しながら、山や海を見るたびに、涙が出てくる。キラキラした放射性物質が見えるような錯覚に何度も陥った。

私は、強制避難こそさせられてはいないが、大好きな故郷であった「いわき」(それはきっと、「いわきでの生活」を意味しているのかもしれない)を失ったのだった。

そのような生活の中、必死に、元の生活を取り戻そうと、放射線について勉強をしたり、情報を集めたりする人たちもいた。私も、その一人だった。いわきから避難することを何度も考え、具体的に避難先を選定する日もあった。しかし、いわきで生まれ育ち、弁護士となって戻ってきた私には、震災後の混乱したいわきに残れば、誰かの、何かの役に立てるのではないか、役に立ちたい、そんな強い思いがあった。子どもが大事ならなぜ避難しないのだという言葉に傷つき、後ろめたさを感じながらも、自分の中でいろいろな理屈を付け、納得させ、残ることを日々、選び続けてきた。

2 住民の間での分断

(1) 津波被害者と原発事故被害者

福島県は、甚大な津波被害にも見舞われた。強制避難区域からの避難者には、賠償金が支払われる一方、隣町のいわき市の住民には、わずかな賠償金しか支払われていない。津波の被害にあい、自宅や全てを失ったいわき市の住民が、困窮して生活を送っている隣で、賠償金を元手に客観的には経済的に余裕のある生活をしている避難者がいる状況で、妬みを感じることを非難することはできないようにも思う。

特に、いわき市小名浜下神白地区には、いわき市の津波被災者用の復興公営住宅と、4町村からの原発避難者用の復興公営住宅が隣接し、公営住宅入居世帯数200という数は、もともとその地区に居住するいわき市の住民よりも多い。ついに、この公営住宅への入居が始まった。管轄が県と市という違いもあり、自治会はどうするのかなど、大きな問題を抱えているが、行政がコミュニティ作りの課題を感じながらも、積極的な手は打てないでおり、今後も支援が必要な地区である。

(2) 放射能に対する考え方

放射能に対する考え方は、多様であり、現状が安全であると断言する人たちがいる一方で、大きな不安を抱えて生活を送り続ける人も多くいる。不安を抱く住民の中には、避難を選択する者もいて、現時点においても、移住の相談はなくなっていない。成元哲中京大学教授らの研究グループが実施した「福島子ども健康プロジェクト」の大規模アンケート結果（避難指示区域外の中通り9市町村、2008年度生まれの子を持つ母親6191人対象）からは、4年を経過した今も、『避難したい』と考えている母親の割合が、年々減ってきてはいるものの、未だ25%いるという。一方で、安心を取り戻したと言って、自主的な避難から地元に戻ってきた人たち、避難生活が続けられずやむなく戻ってきた人たちも多くいる。しかし、そうした人たちにとって、現地で生活しながら不安を抱き続ける母親たちは、復興の邪魔をし、風評を助長する、もしくは、目を背けて生活したい不安を思い出させる邪魔な存在だと指摘されるのだった。いつまでも無知で不勉強でヒステリックな人たちと揶揄されることもある。

しかし、放射性物質による健康被害については、未だ不明な点が多い。平成24年6月、「東京電力原子力事故により被災した子どもをはじめとする住民等の生活を守り支えるための被災者の生活支援等に関する施策の推進に関する法律」（以下、「子ども被災者支援法」とする）が成立し、その中には、「放射性物質による放射線が人の健康に及ぼす危険について科学的に十分に解明されていない」と、明記された。不安を感じるものが合理的であると、法はうたっているのである。私には、その一

文が救いだった。多くの避難者、在住者が、この法律に期待し、それぞれの選択が支援される政策の実現を願い、行動したが、具体的で効果的な支援が国から行われることはなく、ついに、唯一ともいえる自主的な避難者に対する借り上げ住宅の援助も、打ち切りの検討段階に入っている現状にある。住宅援助は、特に母子避難世帯にとっては、避難生活の命綱とも言え、その打ち切りは、避難生活の継続を阻害する大きなダメージとなることは避けられない。

(3) 避難区域再編による分断

富岡町は、平成25年3月に区域再編が行われ、帰還困難区域、居住制限区域、そして避難指示解除準備区域と、町が3つの区域に分断された。区域によって賠償金に差が出て、自由に出入りできる地域と一年に15回のみ立ち入りが許される区域に分かれ、帰還困難区域の住宅の前には一戸毎にバリケードが設置された。道路一本向こうと、こちら側とで、親しかったご近所さんが、全く異なる状況に置かれたのである。同じ仮設住宅に避難し、親しく情報交換をしてきた町民らが、区域再編後、もう会いませんと言われたというエピソードには、本当に心が痛む。国の施策によって、人々の友情といった感情までも、壊されていくのである。

様々な分断と言える状況があり、お互いが傷つかないようにと配慮を重ね、言葉を選ぶ関係か、関係を断つか、人間関係についての決断も迫られていく。

3 乗り越えようとする試みと困難

上記のような分断の状況を何とかしようと、私たちは、平成25年から、「未来会議 in いわき」という対話の場を主催するようになった。考え方はそれぞれ、価値観は多様であるということを前提に、相手を批判しないこと、本音で話すこと、の2つのルールを守って、リラックスした雰囲気の中で対話をするワールドカフェの手法を用いた。その活動を通して、放射能に対する考え方の分断状況が少しは改善できないか、相手の立場を理解はしないまでも、そういう考え方もあると受け止め

ることができれば、気持ちの分断、すれ違いが少しは減るのではないか。そんな想いで続けてきた。

一緒に活動を始めようとしたメンバーの中には、私と同じく子どもを持ち、被災者を少しでも避けて生活したいと思って行動をしてきた人も多くいた。一方、被災地のこれからを語る場には、福島の復興に関心を持つ方々も多く集まり、話の中身は、前向きな話が増えていったように思う。その雰囲気の中、私たち主催者の意図とは逆に、徐々に、不安を語ることを憚られるような、明るい話しかできないような場であるかのような、そんな場の雰囲気になっていったように思う。そして、ある人の不安が、他の人の行動を責めているようにもとれるというナイーブな状況の中、本来であれば対立しない者同士が、相手への配慮から、ほんとうの思いを口に出すことを再び止めるようになっていった。不安を語っても安全な場、とうたった場でさえも、不安を語ること、不安を言葉にすることの難しさ、それが生じさせる分断のような状況が、大きな壁となっていった。徐々に、私たちの対話の場は、「復興派」の集まりなどと表現されるようになっていった。この原発事故後の変化してしまった社会で、子どもたちのために、との考えは同じなのにもかかわらず、手法の違いによって引き起こされる分断は、解消するのがとても難しく、現時点でも、深い溝が残されたまま、心を痛めたままの状態は続いている。

しかし、一方で、その活動を通じて、私は、双葉郡から避難してきたたくさんの方と、友達になることもできた。考え方も立場も違っているが、互いの立場を尊重しあえる関係。友達になると、相手の立ち位置が他人事ではなくなって、もっと事情を知りたくなっていく。そして、実際に彼らの故郷を訪ねさせてもらい、その町での震災前の楽しかった日々のエピソードなどを語っていただいたり、自宅に土足であがらせていただいたり、変わり果て、放置された町の有様を見せていただいたときに、数万人の方を強制避難させ、生活の全てを奪った状態、自分が住んでいる街の隣、同じ社会の中に、こんな世界が広がったままだという事実をちゃんと想像できていなかった自分を恥じた。知れば知るほど相手の痛みが自分の痛みとしても

感じられ、置かれている状況の困難さを前に、何かできることはないかと考えるようになった。原発事故後の課題にとりくむ多くの人が、現在避難者が置かれている状況と、避難指示が出た町の様子を、現場を訪ねて知り、痛みを想像し、自分事として捉えて欲しいと考える。次に、私が見聞きした、避難者の置かれている実情を説明したい。

4 広域、かつ長期の強制避難の実情

(1) 多くの住民は生活の全てを奪われた

区域再編までの間、警戒区域に指定された場所は、一般住民の立入りができなかった。地震によって壊れた建物は、早期に手入れができなかった結果、雨漏りや割れたガラス窓からの風雨の侵入を止められず、2年経過した初めての立入りのときには、雨水による劣化とカビの繁殖と、小動物たちの糞まみれになっていた。冷蔵庫にあった食材は腐り果て、片付けのために扉を開けたときの異臭は、脳裏に強く焼き付き、吐き気と悲しみを人々につきつけた。人のいない町は、震災による被害をそのままに残しただけでなく、より悪い状態へと変えていた。そこにあったはずの笑い声や生活を奪い続けるのが、原子力災害であり、避難政策である。そして、そんな町が、多くの人が震災前と同じように生活している社会の隣に、広範囲に取り残されているのに、多くの人がその事実に関心であることに、私は、狂気を感じずにはいられない。

(2) 復興、帰還政策が進む中での矛盾

平成26年に福島県の浜通りを通過して東京と仙台を結ぶ国道6号線が開通し、平成27年3月には常磐道がいわき市から仙台まで開通し、自動車があれば誰でも旧警戒区域を通過できるようになった。

ある避難者の方は、旧警戒区域を通過する国道を、たくさんの自動車が通る度に、その脇にある自宅になぜ住むことができないのか、理解ができずに苦しいという。「なぜ、自分はここにいるのだろう。」その問いが頭から離れない。避難者からは、

そんな感想が漏れる。復興の道筋を決める国のやり方には、住民らの意向が反映されているとは言い難く、むしろ、避難者の気持ちは置きざりにされていると言わざるを得ない。

(3) 気持ちの揺れ動き

避難を余儀なくされている住民の中には、困難な状況であっても、前向きに明るく生きようと、気持ちを切り替えて、笑顔でいる者も多い。国や東京電力を責めていても、現状は良くならなないと、気持ちを切り替えているのである。しかし、そのような避難者の方が、時々こぼす本音には、前に進むことへの無力感の訴えや、これでいいのかと問い続ける毎日であるとの想いも含まれる。彼らは、勝手な使命感をもって頑張り続けているが、ふと浮かぶ疑問に自ら答えることができないのだと言う。

避難から数年間、熱い思いを抱いて、家族の生活再生や、復興をと頑張ってきた人々の中には、生活が落ち着くに見えるや、うつ的な症状となったりする人も出てきている。

避難が続いているうちは、このような気持ちの揺れ動きがなくなることはなく、むしろ、避難が長期化し、状況が刻々と変化していく中で、更に大きな気持ちの揺れと向き合わざるを得なくなるのかもしれない。

(4) 絶望と光

ある避難者は、避難指示により津波被害者の捜索が続けられず、救えた命を救えなかったこと、見つかるはずだったご遺体が行方不明のままになってしまったことを悔やみ続け、今でも、捜索活動を続けている。そのような活動を見て、できることがあるのであればと、活動に協力を惜しまない人々もいる。

絶望的な中でも、人々の中に他者への思いやりが見えたとき、私は、光を感じたりもする。しかし、そんな状況に人々を追い込んだ事故を、ますます憎く感じたりもする。

(5) 描けない将来像

国策で推進してきた原子力政策の失敗にもかかわらず、国が謝罪して責任を持つことを避けていることから、帰町等の判断は自治体に押しつけられ、様々な想いの住民を抱える自治体は、重い責任を負わされている。将来的な見通しが何らつけられない中、住民たちは、将来帰るか帰らないかといった判断ができる以前の状況に置かれており、不安定なままである。

自宅の状況が悪い方がむしろ、次の選択を決断しやすいという話もある。地震被害が大きかったり、雨漏りで自宅内がカビでいっぱいになり、小動物の糞まみれの自宅を持ったりしている方ほど、その自宅への帰還を諦める傾向が強いという。一方で、住宅の傷みが小さい住民ほど、戻ってその場で生活することが現実的であることから、帰還への想いを断ちきりにくいというのだ。

どちらにしても、今後の町のあり方が決まり、なおかつどの程度の住民が帰還するのかが決まっていかなければ、将来像は描けない。住民が「戻りたい」と考える故郷は、隣近所に知人が多くいて、安心して生活ができたコミュニティである。隣人のうち、誰が帰還して誰が移住してしまうのか、そういった情報まで総合的に材料にしなければ、判断はできないが、それぞれの住民が決断をするタイミングは、決して同じではない。

(6) 頻発する諸問題

汚染水の放出についても、漁協の同意という要件をつけられた結果、むしろ、漁協が復興の妨げとなっているなどと、住民から責められる対象となるなど、新たな分断も招いている。

(7) 子どもたち

故郷への想いが強い大人たちの苦悩の一方で、子どもたちについて見ると、表向きに出てくる言葉は、むしろ新しい生活になじんでいるかのようにも見える。しかし、「興味ない」という言葉の裏に、親に心配をかけたくないという配慮や、傷ついた自分に触れたくないという想いがないと断言することはできない。余震が来る度に極度に怖がる小学生の私の娘は、「住んでみたい街を描く」という街づくりワーク

ショップに参加したときに、星型のなかに「地震のない町」と書いた。そして、10歳の「2分の1成人式の日」に話した将来の夢は、「放射能を消す機械を作って、みんなを笑顔にしたい」だった。

震災時小学生だったある子どもは、震災後4年半たった最近、自宅に初めて足を踏み入れた。置かれていたピアノを演奏したいと言ったその子は、小学校の校歌を演奏したという。子どもの故郷への想いをかいま見た親は、その姿に涙を隠せない。

今、福島周辺の子どもたち、特に、避難区域出身の子どもたちは、「復興の担い手」と大人から表現されてしまっている。その期待を十分に理解している子どもたちは、大人の期待に応えようと頑張っている。その姿が、私には痛々しくてならない。ある広野町出身の高校生は、「住民と交流して意見を聞いて、復興に取り入れたい」と言った。それは大人の役割のはずである。子どもが、子どもらしくいることができない原発事故後の状況で、私たち大人は何をすべきなのか。

(8) 町の傷みと急激な変化

人々がいなくなった町は、地震や津波の被害が放置されたまま荒れていた。津波に流されて壊れた自宅はそのまま朽ち果て、埃にまみれ、田畑にはセイタカアワダチソウの黄色い花が繁茂して元の姿は全く感じられない。

その後、除染が始まると、町の様子は一気に変わっていった。津波被害の家は基礎ごと撤去され、次に気づくと黒いフレコンバッグの山になっていた。山林は剥げていき、田畑は茶色を取り戻していく。除染中という青色の派手なのぼりが5メートルおきに並び、さながらお祭りのような除染現場には、大勢の作業員がいる。気が付くと巨大な構築物が建設を始め、仮の減容化施設という名の焼却施設が海際に現れ、町並みは、もはや人々の記憶にある町ではなくなっていた。

避難者が戻りたいと言う故郷は、「震災前の故郷」である。「金はいらない。元に戻して欲しい」と言う避難者が多い。いま、急激な変化を遂げた町は、ほんとうに、彼らの戻りたい故郷なのだろうか。隣人が戻るとも限らない、近所にいた親族が戻るとも限らない。戻っても一人かも知れない。そのような一人一人の選択に任せた

後の町作りは、困難を極めている。

(9) 故郷への想い

帰還困難区域に指定された住民の中でも、高齢者の多くは、死ぬまで故郷に戻れないと考えている。ある年配の住民は「元の町でみんな仲良くしてほしい。そのとき、私は、生きてはいないけれど」と微笑んだ。

その姿を見て、そういった人たちのために何ができるかと考え、二度と住むことはない、何十年も住んだ愛着のある自宅を、せめて綺麗にしてから別れを告げたいとの要望や、一時帰宅の際せめて自宅でお茶を飲んだりお弁当を食べたりしたいなど、住民のほんのちょっとした笑顔のために、住民を福島県内どこにでも迎えに行き、一時帰宅に付き添い、片付け等を行うボランティアを始めた住民もいる。

今後の町のあり方が見えない。その苦悩は、想像を超える。

アンケート結果を見ると、帰還したい人の割合は少ない。しかし、行政は、帰還して町を再興する方向ばかり向いているように見え、予算も町作りにはばかり使われ、除染と、インフラの整備ばかりがどんどん進んでいく。ハード面が整っていくことは目に見えてわかり、それは復興が進んでいく様子として人の目には映るが、果たして、人の心情に配慮したソフト面はついていっているのだろうか。

5 廃炉までの長い道のり

短くても、現時点においても、40年はかかると言われる廃炉までの道のりは、私たち大人が活着ている内に見届けられないのではないかと思ってしまうほど、途方もない。その間、私は、大きな地震が来る度に、原発の状況と原発周辺の放射線量をチェックする生活を続けることになるだろう。

私が、原発から約40キロメートルの距離しかないいわき市に居住を続け、故郷のためにという活動を続けることで、私の子どもたちが、いわき市への郷土愛を持ってしまわないか。そうなることはとても素敵なことであるはずだけれど、そうなったときに、子どもたちをこの土地に縛り付けることになってしまうのでは

ないか。わざわざこの地で葛藤や不安を抱えて生活するのではなく、子どもたちにはもっと自由なところでのびのびと活躍して欲しい。私の中には、そんな葛藤もある。

中間貯蔵施設への放射性廃棄物搬入が始まったが、今後、周辺地域には、一日数百台のダンプが通る見込みとも言われる。高線量の廃棄物を乗せたトラックが事故を起こした時、放射線の管理ができるのか、被ばくを避けられるのか、その後の除染はどうなるのか、対応策はまだ見えない。

また、放射性廃棄物の最終的な行き先の問題も、県域を越えた大きな課題であり、解決策は見つかっていない。双葉郡の方への意向調査でも、様々な意見が出てくる。ある住民は、既に汚染された双葉郡に最終処分場を作るのが社会のためだ、役に立てるのであれば立ちたいと述べ、また、ある住民は、最終処分場が近所にある町に住民が住むようになることは避けたい、大きな被ばくの影響がないというのであれば、全国で平等に負担をすべきだ、と述べた。多くは、自分のこと、家族のこと、町民のこと、そして、社会のことを考え、葛藤の中、一つ一つの重大すぎる選択ができずに、抱え込む日々を送り続けているように見える。

6 長く続く苦悩

廃炉作業は、私たちの子、孫の世代に担ってもらわなければならない。また、復興を担わされる、背負わされる子どもたちが押しつぶされないか。子どもたちは、何かしたいと目を輝かせ、真剣に取り組んでいる。しかし、その行動は、自ら選んでいると言えるのか。私もそうだが、震災の辛い体験を乗り越えるために、前向きな活動をしている大人は多いように思う。子どもたちにとっては、震災で受けた心の傷や衝撃は、大人以上に鮮烈かもしれない。

子どもたちの成長に不安も感じる一方で、震災後、子どもたちは、この社会において考え方はそれぞれなのだと、多様性を受け入れているように感じる。例えば、地元食材を摂取したくないために給食を食べない子どもの家庭方針について、そう

いう考え方もあるよね、別にいいんじゃない、と。そんな子どもたちがいる一方で、大人たちは、相変わらず、考え方の違う相手を買め合ったりしている。多様な価値観で共生できるのか、難しい課題をつきつけた原発事故後、子どもたちの成長は、私にとっては光でもある。

しかし、多くの人が、未だに苦しみ続け、出口さえも見出せていない状況に、心を痛めない日はない。その一方で、原発事故などなかったかのような生活が続く首都圏の様子を受け入れることができずに、怒りばかりを感じる自分にどう向き合えばいいのか。

原発事故後の状況を何かしら改善しようと動いている人々の多くは、言葉には出さないし表現しないけれども、当然、原発は動かすべきではないと考えている。二度と、このような悲惨な状況が起きて欲しくないと、強く強く願っているから。言葉に出せない今の社会のあり方に大きな疑問を感じつつ、多くの人がより自分らしく生きていける社会の実現のために、私には、できることをひとつひとつしていくことしかできない。

以上